

【連載：「試聴室探訪記」第31回】  
～谷口ともり、魅惑のパノラマ写真の世界～  
ダブルウーファーの魅力全開  
永瀬邸訪問  
フォトグラファー 谷口 ともり・編集委員 森 芳久



今回は茨城県守谷市にお住まいの永瀬 宗重（ながせ そうじ）氏のリスニングルームを訪ねました。永瀬氏はお医者さま(医学博士)で、永瀬内科院長として診療にまたご自身の研究にお忙しい毎日をご過ごされています。そんな中無理をお願いし、昼休み時間に病院に隣接したご自宅のリスニングルームにお邪魔させていただきました。

まずは永瀬内科にお伺いいたしました。待合室には静かに BGM が流れていました。音のする方を眺めると、なんとそこには壁のコーナーに取り付けられた Cello の Amati（マーク・レビンソンが作ったスピーカー）があるではありませんか。しかもそれを McIntosh のアンプで鳴らしているのです。オーディオ好きの患者がこのサウンドを聴きまた装置を眺めれば、ここの院長が只者ではないことに直ぐに気がつくことでしょう。よしんばオーディオに興味が無くとも、この待合室の心地よい音に、病気に対する不安が少しは和らぐのではないのでしょうか。まさに診療前に既に心を安らげる治療が施されるとは名医に違いありません。

さて、案内されたリスニングルームに通された瞬間、四方の壁面に整然と並べられたオーディオ機器とその豪華な部屋に驚かされました。部屋の正面には、Apogee のフラッグシップモデル Diva が二組も並べられ、さらにその両脇には B&W Nautilus が置かれています。左壁を眺めれば、JBL の Project Everest DD65000 と Goldmund の Epilogue 1&2 が、右壁にはパイオニアの名器 Exclusive 2401 Twin（ステンレスホーンのミッドとツイーターが追加されています）と Lumen White の White Light Diamond が設置されています。そして背面にはこれらのスピーカーをドライブするパワーアンプ群とコントロールアンプやプログラムソースが積み上げられ、な

んとその前には JBL の Olympus S8R が置かれています。これだけの高級スピーカーを自在に切り替えて音楽を楽しむ、オーディオファンが夢見る贅沢な空間がここにあるのです。

部屋の広さはやや縦長の約 47m<sup>2</sup>、天井高が 4m と余裕の広さです。パノラマ写真で天井をズームすると判るように、実際には照明器具の上にも空間があり音響空間としてはさらに大きくなります。これがこの部屋の音の素晴らしさの秘密なのでしょう。

今回主に聴かせていただいたのはもちろん正面の Diva です。米国 Apogee 社は 1981 年から 1999 年までユニークなりボン型スピーカーで世界のオーディオファンを魅了しました。しかし、インピーダンスが極端に低いため当時としては、これを上手くドライブするアンプ選びに苦労したものです。Krell の社長だったダン・ダゴステイーノ氏がこの Apogee を愛用し、自社のアンプのリファレンスに用いていたことはあまりにも有名な話です。そして、Apogee を見事に鳴らすことが出来るアンプということで Krell の名声も上がったのです。私も一時期同社の Duetta (Diva より一回り小型のモデル) を使っていましたが、このスピーカーにしか出せない音に夢中になりました。

その Apogee の最上位モデルの Diva それもダブルでの試聴は初めての経験ですから、興味津々で聴かせて頂きました。素晴らしい臨場感で低域も非常に豊かに鳴っています。ダブルにした効果は顕著です。特にヴォーカルが綺麗に聞こえました。永瀬氏のお気に入りのソフトの一枚、中丸美千繪の声が艶やかに部屋の前方に浮かび上がります。二つの高域ユニットによる干渉や定位の乱れを心配しましたが、それは全くありませんでした。その理由は直ぐに判明いたしました。ウーファー部だけは両方を鳴らし、高音域はシングルで鳴らしているのです。なるほど、ダブルウーファー方式だったのです。ここでは、Apogee スピーカーを評した「低音域が軽い」、「低音域が不足気味」といった一般的なマイナス評価は見事解決されていました。ダブルウーファー効果で、締まった低音、リボン型独特の透明感溢れる音、まさに Apogee の魅力全開のサウンドが部屋一杯に響き渡りました。永瀬氏の Apogee にかける深い思いと熱い情熱が、素晴らしいサウンドになって見事に応えてくれています。ダブル Diva つまり Diva の Duetta とは、洒落としてもなかなか面白い試みです。Apogee ファンはこの洒落に拍手を送ることでしょう。

話は前後いたしますが、永瀬氏は学生時代バンドを結成しドラマーを努め、またそのバンドの録音も担当したことからオーディオにのめり込んだそうです。JBL の音に魅せられ L-88 Plus から始まり、ついにはスタジオモニターの 4350 に行き着きます。そこでダブルウーファーの魅力に取り付かれました。しかし、このダブルウーファーを鳴らし切るには相応のノウハウと経験が必要だったのです。何度も失敗と失望を体験し、2001 年同じ悩みを持つ仲間と立ち上げた会が「Double Woofers」でした。その会長はもちろん永瀬氏ご本人、現在約 20 名の会員を擁し年数回の会合が開かれています。

確かに、氏が所有するスピーカーはほとんどがダブルウーファー方式です。別室にも 4350 と 4345 が置かれていますし、このリスニングルームも Nautilus 以外は全てダブルウーファーのスピーカーが並んでいます。

JBL の Project Everest DD65000 の音も聴かせ頂きましたが、こちらも上手に調教され、しつとりとした音で名医の処方素晴らしさを感じさせてくれました。残念ながら今回は他のスピーカーを聴く時間はありませんでしたが、いずれのスピーカーもそれぞれ永瀬氏が吟味したパワーアンプによって駆動されています。また、これらのスピーカーユニットのディバイディング周波数やフィルター特性も氏が設定してこの部屋で最も良く鳴る状態に仕上げられています。

参考までに永瀬氏より頂いた各メインスピーカーとアンプとの組合せ、またチャンネル・ディバイダーの定数を(表1)、(表2)に記しました。

それでは今回も谷口ともり氏の素晴らしいパノラマ映像による永瀬氏の豪華なオーディオルームと機器の数々をじっくりお楽しみください。

尚、バック音楽は永瀬氏のお好きなバッハ無伴奏チェロ組曲第2番前奏曲です。

Wiring Diagram		6/26/2016
<u>JBL EVEREST DD65000</u>		
Viola Spirito →	Pass Labs XVR-1 →	Cello Performance II (genuine high) / UV-211 single (YAMAHA wood horn)
	(106/750) →	Goldmund Mimesis 29.4ME (low)
		Goldmund Mimesis 29Evo (super low)
<u>Exclusive 2401 twin with Stainless Horn</u>		
Mark Levinson →	Accuphase →	Cello Rhapsody ( high)
No.52	DF45 mono →	Goldmund Mimesis 28ME (low)
	(100/710) →	Goldmund Mimesis 28ME (super low)
<u>B &amp; W Nautilus</u>		
Linn Exakt →	Linn Exaktbox →	Viola Forte II (high)
DSM		Viola Bravo (mid high)
		Viola Forte II (mid low)
		Viola Bravo (low)
<u>Apogee Diva Double</u>		
Goldmund Mimesis 24ME		Goldmund Telos 600 (high)
		Goldmund Telos 600 (mid)
		Goldmund Telos 600 (low)
		Goldmund Telos 600 (super low)
<u>Goldmund Epilogue 1&amp;2</u>		
Cello Audio Palette		Cello Performance II
<u>Lumen White White Light Diamond</u>		
Mark Levinson		UV-211 single (San-Ei version)
No.32		
<u>JBL Olympus S8R</u>		
JOB pre		JOB 300 mono
<u>Artemis EOS</u>		
Mark Levinson		Cello Rhapsody
No. 326		
<u>JBL 4350A</u>		
Mark Levinson →	Mark Levinson →	Mark Levinson No.29 (high)
ML6	LNC2 (100/300) →	Pioneer M-Z1a x 4 (low)
<u>JBL 4345</u>		
Mark Levinson ML7A		Mark Levinson ML3

(表1) 機器接続ダイアグラム

Parameters for Channel Dividers

06/28/2016

speaker	band	low cut slope (dB/oct)	low cut freq (Hz)	high cut freq (Hz)	high cut slope (dB/oct)
Everest DD65000	high	24	750	pass	-
Pass Labs XVR-1	low	24	106/pass	750	24
	super-low	-	pass	106	24
Exclusive 2401	super-high	24	7100	pass	-
Accuphase DF45 (mono)	high	48	710	pass	-
	low	12	pass/100	710	48
	super-low	-	pass	100	24
Apogee Diva	high	12	8000	pass	-
Goldmund mimesis24ME	mid	12	250	16000	12
	low	-	pass	800	12
	super-low	-	pass	100	12
4350	wood horn	18	650	pass	-
Mark Levinson LNC2	high	18	300	pass	-
	low	-	pass	300	18
	super-low	-	pass	100	18

(表 2) 主な使用スピーカーのディバイディング特性表



永瀬 宗重（ながせ そうじ）氏

## パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの画像をクリックしてご覧ください。  
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
- + 画面のズームイン
- 画面のズームアウト
- ← 画面の左移動
- 画面の右移動
- ↑ 画面の上方向への移動
- ↓ 画面の下方向への移動